

本校の考える「防災教育」

1. 本校における「防災教育」の目的

①命を守る「防災教育」

防災教育の当然の目的であり、第1の任務といえる。

また、「命」を守ることは、教育の根幹に関わることでもある。

「命」を火山災害から守るためには、まず第1に、火山噴火の直撃から身をかかわすことである。有珠山噴火の直撃から身をかかわすためのノウハウをしっかりと身につけさせなければならない。

具体的には、

- ・火砕流や火砕サージから身をかかわす
- ・噴石から身をかかわす
- ・泥流から身を守る
- ・降灰から身を守る

などである。

②財産を守る防災教育

これもまた、「防災教育」の当然の任務といえる。

2000年噴火では、幸いにも命を落とした人はいなかった。しかし、生活の基盤である家をなくした人は多数にのぼった。

来るであろう次の噴火で大切な財産をなくさないために、集団移転や種々の砂防工事がおこなわれている。それは子どもたちにとっても、住宅の移転はどここの学校に通うかという問題を筆頭に、大きな問題だった。しかし、それを受け入れることも必要である。それも含めて、「財産を守る防災教育」とおさえる。

生活基盤 1977年噴火で、残念ながら尊い命が失われたことを教訓にして、泥流口がつくられた。それから20年あまりの現在、2つのことを教訓として受け止めるべきであろう。

それは、第1に「砂防工事が無駄ではなかった」ということである。もしも泥流口がなかったならば、2000年噴火での熱泥流でもっと甚大な被害が起こったであろう。それを防ぐことができたということから、砂防工事の有効性を学べる。

第2に、「自然災害は人間の予想を超える」ということである。前回噴火後につくられた泥流口が、まさかその上の国道の橋によってせき止められるとは考えていなかった。噴火自体は小規模であった2000年噴火にしてもそうなのである。

2. 科学の目を持った「防災教育」

命と財産を守る「防災教育」のためのノウハウも、「なぜ？、どうして？」という疑問に答えなければ、心構えや日頃の備えの範疇にとどまってしまうだろう。

もちろん、心構えも日頃の備えも必要不可欠である。否、絶対必要なことと言えるだろう。しかし、「なぜそうしなければならないの？」という疑問に答えることで、子どもたちはそれらを腑に落ちる形で実践するのではないか。

2000年噴火の際、多くの住民が大規模な警戒網をくぐって自宅に戻った。これは、火砕流や火砕サージの恐ろしさに対する無知が少なからずあったのではないか。

また、2000年噴火の時に多くの人々は（我々を含めて）前回の1977年噴火のシナリオどおりに進むことに疑いを持たなかった人も多い。山腹噴火は前々回の1944年噴火で昭和火山を産んでいることを知っているのにもかかわらずである。なぜそのような勘違いをうんだかという、有珠山ということと火山ということの無知なる故ではないだろうか。

有珠山噴火と同じ年におこった駒ヶ岳の小噴火では、最初に気づいたのは山麓に住む住民だという。次の有珠山噴火の時に、同じような未来の住民を用意することが必要である。

私たちは、心構えも日頃の用意もできる未来社会の担い手である現在の子どもたちのために、「科学の目」を用意したい。

3. 専門家・地域と連携した「防災教育」

もともと、防災は地域と連携するこよなしに成り立たない。当然ながら、地域と連携する。

本校の特徴は、専門家や専門機関との連携である。これは偶然ではない。なぜなら、科学者たちが積極的に地域住民の中に入ろうという問題意識を持ったからである。しかし、それを見逃さずに、本校の「防災教育」にいかそうとできたのは、我々温泉小学校の教師集団のヒットであと自負している。

専門家と学校の協力・共同は、宇井教授と我々の共同研究という形で結実しつつある。防災関係の言葉は、専門家による言葉である場合が多い。したがって、防災情報は難解である場合もある。例えば、「臨時火山情報」と「緊急火山情報」の関係である。これとて、偶然ではあるが、有珠山噴火の直前に改訂されたものである。

そこで、防災関係者の間では、「防災情報を解説できる人の育成」を問題意識にしている。われわれの「防災教育」は、まさに、「防災情報を解説できる人の育成」をめざしている。だから「専門家との連携」が必要となってくる。

私たちは、2000年噴火だけではなく、1855年をはじめとする悲劇の要因をしっかりと理解し、科学の目をもって次の噴火に備えることのできる子どもを育てたい。

4. 火山の恵み

ほとんどの火山は、噴火するとき以外は人々に多くの恵みを与えてくれる。温泉、景観など、子どもたちの生活に直結するのが有珠山である。

火山災害は、ひとたびおこると長い期間人々の生活を脅かす。しかし、その何十倍、何百倍もの期間、人々の生活に潤いをもたらす。一件無関係に見えがちな有珠湾の豊かな魚礁も、旧有珠山の山体崩壊によってもたらされたものである。それが、5000年にもわたって有珠山周辺に住む人々への恩恵となっている。

火山の恵みを知るということは、火山災害を逆手にとって観光資源としようという現在の洞爺湖温泉の観光戦略とも一致する。2000年噴火による被害施設を残しているが、それは本校児童の家でもある。自分が住んでいたかけがえのない家が被害に遭い、それが多くの人々の目にさらされることは大きなストレスにもなっている。しかし、それが世界的にもまれな貴重な資源であることを知ったとき、そのストレスは解消されるのではないか。

火山の恵みについて知ることは、同時に地域そのものを知ることにもなる。

